琉球大学学術リポジトリ

フィリピンにルーツを持つ子どもの離島における社会関係：沖縄県に暮らす障がいのある小学生の事例から

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄移民研究センター
	公開日: 2018-11-13
	キーワード (Ja): 在日フィリピン人, 障がい児, コミュニティ, 教会, 島嶼
	キーワード (En):
	作成者: 矢元, 貴美, Yamoto, Kimi
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002010091

移民研究 第 11 号　2016　81-99

フィリピンにルーツを持つ子どもの離島における社会関係
－沖縄県に暮らす障がいのある小学生の事例から－

矢 元 貴 美

Ⅰ．研究の目的と背景
Ⅱ．先行研究の検討
Ⅲ．調査方法と調査対象者
Ⅳ．調査結果
Ⅴ．地域での社会関係構築を可能にする島嶼性
Ⅵ．今後の課題

キーワード：在日フィリピン人，障がい児，コミュニティ，教会，島嶼

Ⅰ．研究の目的と背景

本稿の目的は，離島におけるフィリピンにルーツを持つ障がい児の地域社会での社会関係の特徴を考察することである。本稿では沖縄県石垣市に暮らし，小学校の特別支援学級に在籍している，フィリピンにルーツを持つ男子児童Ａくんに注目する。Ａくんが地域社会のどのような場で周囲の人々とどのような関係を構築しているのかを，Ａくんの母親へのインタビュー，特別支援学級や障がい児通所支援事業所でのインタビューや観察，教会での観察に基づき明らかにする。

厚生労働省の統計では 1996 年から 2014 年の間に日本国籍の親と外国籍の親の間に生まれた子どもは 414,505 人，外国籍の両親の間に生まれた子どもは 188,141 人である。日本国籍の親とフィリピン国籍の親の間に生まれた子どもは同期間に 81,771 人おり，外国籍である両親の間に生まれた子どものうち，両方または一方の親がフィリピン国籍である者は同期間に 8,531 人である [1]（厚生労働省，2015a ; 2015b）。

文部科学省の学校基本調査によると，2014 年度には特別支援学校の小学部には 38,168 人，中学部には 30,493 人，高等部には 65,370 人が在籍していた。また小学校の在学者数 6,600,006 人のうち 129,018 人，中学校の在学者数 3,504,334 人のうち 58,082 人が特別支援学級に在籍していた（文部科学省，2015a）。

特別支援学校や特別支援学級で学んでいる外国にルーツを持つ子どもの人数を正確に知るための統計資料はないが，文部科学省の学校基本調査と「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 [2]」が参考になる。

2014 年度の特別支援学校の在学者のうち外国人在学者は小学部に 269 人，中学部に 126

表 1　特別支援学校（小学部・中学部・高等部）の外国人在学者数と構成比

小学部の在学者数	外国人在学者	構成比	中学部の在学者数	外国人在学者	構成比	高等部の在学者数	外国人在学者	構成比
38,168	269	0.7%	30,493	126	0.4%	65,370	251	0.4%

出典：文部科学省「平成 26 年度　学校基本調査」より筆者作成。

人，高等部に 251 人であった。外国人在学者数には日本国籍で外国にルーツを持つ子どもは含まれていないが，小学部では約 0.7%，中学部と高等部では約 0.4% が外国人在学者である（表 1）（文部科学省，2015a）。

2014 年度には日本語指導が必要な児童生徒のうち外国人児童生徒は 29,198 人，日本国籍の児童生徒は 7,897 人であった。特別支援学校に在籍する外国人児童生徒は 177 人で，15 年間で約 3.5 倍になり，日本国籍の児童生徒は 49 人で，15 年間で約 3.3 倍になった。特別支援学校（小学部・中学部・高等部）の在学者数 134,031 人に占める割合は 0.1% 強と高くはないが，増加している（文部科学省，2015b）。

日本語指導が必要な外国人児童生徒のうち母語がフィリピン語[3)] である者は 5,153 人で全体の約 17.6%を占め，17 年間で 8 倍強となり，母語別では第 3 位を占める。日本国籍の児童生徒でフィリピン語を使用する者は 2,253 人で，言語別では第 1 位である。言語別の在籍状況では，フィリピン語を使用する外国人児童生徒の構成比は特別支援学校では約 17.5% であり，ポルトガル語に次ぐ第 2 位を占めている。日本国籍の生徒の構成比は特別支援学校では約 14.3% で日本語と英語に次ぐ第 3 位である。特別支援学校に在籍しているフィリピンにルーツを持つ子どもの割合が高いと言える（文部科学省，2015b）。

国籍や日本語運用能力にかかわらず，障がいのある外国にルーツを持つ子どもたち（以下，外国にルーツを持つ障がい児）が学校や地域社会でどのような社会関係を構築しているのかに焦点を当てた研究は少ない。障がいのある子どもや外国にルーツを持つ子どもの支援には，多様な主体が関わる必要があると指摘されている。本稿は，外国にルーツを持つ障がい児のみならず，日本で暮らす障がいのある子どもたちの支援体制に示唆を与えられると考える。

なお，本稿では「フィリピンにルーツを持つ子ども」とは，両親または一方の親がフィリピン人またはフィリピン出身である子どもとする。

Ⅱ．先行研究の検討

外国にルーツを持つ障がい児を対象とした研究には，日本語教育や障がい児教育の視点から，発達障がいのある外国人児童の行動や発言を分析した研究（菅原，2004；黒葛原・都築，2011）や，発達障がいや自閉傾向のある外国人児童に対する，学校内の生活面や学

習面における支援の在り方を検討した研究（境・都築，2012；早川・都築，2012），外国人学校における在日外国人児童生徒への教育実態や取り組みを扱った研究（吉田・高橋，2006）がある。

以上の研究では，外国にルーツを持つ障がい児の教育ニーズの把握が困難であることや，支援や指導の在り方や関連領域の専門家の連携等が課題であることが指摘されており，重要である。しかしながら，学校内での児童生徒のニーズ把握と支援方法は論じられている一方，周囲の教師や子どもたちとの関係には触れられていない。

外国にルーツを持つ障がい児や保護者の地域社会との関係や，子どもが母親の文化的背景を受け入れることが重要であると論じている研究もある。湯原・大西・加納（2000）では，障がい児を持つ東南アジア出身の外国人家族への支援事例に基づき，外国人家族が地域社会への関係を持てるようにすることや，関係機関が連携した支援体制の整備が必要であると指摘されている。髙橋・中村（2010）では，特別支援学校や特別支援学級に在籍する外国人児童生徒と保護者に対しては，学級担任のみが支援を担い，学校や地域に支援が広がらないことや，母親が情報入手や地域参加に困難を抱えていることが明らかにされている。また子どもの多くは日本生まれであることから，文化的背景を肯定することやアイデンティティを形成することが難しいという。

フィリピンにルーツを持つ障がい児や保護者にとっても，同様の困難を抱えていることが推察される。以上の研究で連携が想定されているのは行政が運営する機関や公共サービスであり，地域社会での関係や，母親の出身国とのつながりの構築は具体的に言及されていない。

一方，外国にルーツを持つ子どもに限らず，学童保育が障がい児の地域社会での関係構築の機能を持つと指摘する研究がある。たとえば三好（2009）は，障がい児にとって，家庭と学校以外の第三の生活の場である学童保育がインクルーシブな性質を有しており，地域とのつながりの構築や地域における人間関係の構築の場となっていることを明らかにしている。

フィリピンにルーツを持つ子どもたちの学校外での人間関係構築や社会参加の場の機能や役割も研究されている。高畑・Vilog（2012）では，インマヌエル・クリスチャン・フェローシップ（ICF）の日曜学校で，日本の学校に通う子どもたちに信仰を通じた規範的価値観を教えていることが紹介されている。三浦（2012；2015）では，プロテスタント教会の小学生向けの日曜学校や中・高生のユースグループの事例が挙げられている。日曜学校には親の要望による英語の授業を行う場と，教会中心の友人関係形成の場としての役割が求められているという。ユースグループは，学齢期途中にフィリピンから移動してきた1.5世と日本育ちの日比国際児が，同じフィリピン系の友人と集える場であり，ルーツを再確

認する場や新たに知る場でもある。

三浦（2013 ; 2015）では，教会以外に地域の学習教室もフィリピンにルーツを持つ子どもたちの人間関係構築や社会参加の場であることが明らかにされている。フィリピンにルーツを持つ子どもたちにとっては地域の学習教室が，学校での学習を補完し学業達成を促す場であるだけでなく，ネットワークを築ける場でもあることが指摘されている。

以上の研究ではいずれも都市部におけるフィリピンにルーツを持つ子どもたちを対象としており，離島に暮らすフィリピンにルーツを持つ子どもにも共通点があるかどうか検討する必要がある。

近年，教育や福祉を含む様々な分野で，コミュニティのつながりや人間関係を分析する際に，社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）という概念が用いられている。社会関係資本は様々に定義されているが，パットナムによる定義では，「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる，信頼，規範，ネットワークといった社会組織の特徴（パットナム，2001 : 206-207）」とされている。

稲葉は，「社会関係資本の定義はさまざまだが，基本的には皆同じ方向を向いて，人々や組織の間に生まれる協調的な行動を分析するという課題に取り組んでいる」とし，「基本的な構成要素としては『社会における信頼・規範・ネットワーク』を含んでおり，〔中略〕他者に対する信頼，『情けは人の為ならず』『持ちつ持たれつ』『お互い様』といった互酬性の規範，そして人やグループ間の絆であるネットワークを意味しているのである（稲葉，2011 : 27）」と述べている。

社会関係資本と子どもの教育と福祉の関係についてパットナムは，「子どもの発達は，社会関係資本によって強力に形作られる」とし，「児童の家庭，学校，友人集団，そしてより大きなコミュニティ内における信頼，ネットワーク，互酬性規範は，広範な影響を児童の機会と選択に，そして行動と発達に与えている（パットナム，2006 : 362）」と述べている。

本稿では，社会関係資本が子どもの行動や発達に大きな影響を与えているという視点に基づき，社会関係資本の概念に準拠して分析することにする。

Ⅲ．調査方法と調査対象者

1．調査方法

2013 年 8 月と 11 月に沖縄県の石垣島，2014 年 11 月に沖縄本島において調査を実施した。調査対象者はフィリピン人の母親（I −4）を持つ男子児童Ａくんである。調査方法は，Ａくんが通う公立小学校（以下，Ｘ小学校）と，放課後等デイサービス[4]を提供している障がい児通所支援事業所（以下，事業所Ｙと事業所Ｚ）の職員と母親へのインタビュー，Ｘ

小学校，事業所Ｙ，教会での観察である。Ａくんの母親とＡくんが在籍する特別支援学級の担任教員へのインタビューは 2013 年 8 月にそれぞれ約 1 時間，事業所Ｙと事業所Ｚの職員へのインタビューは 2013 年 11 月に約 30 分～ 40 分間実施した。Ｘ小学校の特別支援学級および協力学級[5]（普通学級）での観察は 2013 年 11 月に始業前から終業時まで約 9 時間，事業所Ｙでの観察は 2013 年 11 月に約 3 時間実施した。また 2013 年 11 月 4 日に石垣島のカトリック教会で開催された 60 周年記念行事で約 5 時間半，2014 年 11 月 1 日に沖縄本島のカトリック教会で開催された，年に 1 度フィリピン人信者が集まるイベントで約 4 時間半の観察を実施した。

インタビューには半構造化インタビューを用いた。小学校や事業所の職員へのインタビューでは，特別支援学級や事業所の概要，Ａくんが在籍又は通所するようになった経緯，Ａくんに対する支援内容，Ａくんの母親がフィリピン人であることへの配慮，家庭と学校と事業所の連携を質問した。Ａくんの母親へのインタビューでは，生い立ちや経歴，キリスト教の信仰，子育て，近隣との関係を伺った。

Ａくんの母親へのインタビューではフィリピン語，英語，日本語を用い，通訳は介していない。その他のインタビューでは日本語のみを使用した。インタビュー内容はその場でメモに取り，インタビュー後にまとめ直した。Ａくんの母親へのインタビューは承諾を得た上で録音し，文字起こしを実施した。

以下ではＡくんと家族の略歴と，Ｘ小学校，事業所Ｙ，事業所Ｚの概要を概観した後，Ａくんがどのような場で周囲の人々とどのような関係を構築しているのかに注目し，事例を挙げながら分析する。

2. Ａくんと家族の略歴

Ａくんは日本人の父親とフィリピン人の母親との間に日本で生まれ，国籍は日本である。沖縄県石垣市で 40 歳代の母親と高校生の兄とともに暮らしていた。4 ～ 5 歳の時に先天性の疾患であると診断され，精神運動発達遅滞が見られた。調査当時，Ｘ小学校の 5 年生で特別支援学級に在籍していた。Ａくんが 1 年生と 2 年生の時，Ｘ小学校の特別支援学級の在籍人数が多く，多動性障害のある児童も複数在籍していた。そのため，おとなしいＡくんは落ち着いて勉強できないだろうと判断され，2 年生までは普通学級に在籍し，3 年生から特別支援学級に在籍するようになった。

小学校 3 年生の時から 2 か所の障がい児通所支援事業所に通い始め，調査当時は事業所Ｙに週 2 回，事業所Ｚに週 4 回通っていた。障害のある子どもの放課後保障全国連絡会（全国放課後連）による 2013 年の調査では，90％以上の子どもが複数の放課後等デイサービスを提供する事業所を利用している（原田，2015：25）ことから，2 か所の事業所に通う

Ａくんの事例も，複数の事業所を利用している状況に該当している。Ａくんは 5 年生になってからスイミングスクールにも通っていた。

Ａくんの母親は 20 年以上前，仕事のために初来日した。10 年後に結婚して石垣市に定住し，約 5 年前に離婚した。ホテルの清掃の仕事や病院の看護助手の仕事を経て，調査当時は介護施設で介護職員として働いていた。Ａくんの兄はフィリピンで生まれ，フィリピン国籍である。4 歳の時に来日し，小学校高学年の約 1 年半はフィリピンで，他の期間は日本で暮らし，調査当時は公立高等学校の 3 年生であった。

3. Ｘ小学校，事業所Ｙ，事業所Ｚの概要

Ｘ小学校は市街地の郊外に位置し，校区は住宅地や商業地域が広がる 3 つの地区から成っている。調査当時の学級数は特別支援学級 1 学級を含む 20 学級で，500 名以上の児童が在籍していた。Ａくんの協力学級には 40 名が在籍しており，Ａくんともう 1 名の特別支援学級に在籍する児童がその協力学級に参加していた。特別支援学級にはＡくんを含む 3 名が在籍し，教員 1 名が担当していた。

事業所Ｙは開所してから約 4 年半で，公的サービスとして設立されて約 2 年であった。未就学児から高校生までが通所しており，未就学児は約 15 名，小学生は約 30 名，中・高生は約 15 名であった。月曜日から土曜日まで開所しており，1 日の定員は 10 名である。学年によって通所する曜日が決まっており，土曜日は他の離島からも子どもたちが通ってくる。スタッフは兼任も含めて 18 名おり，4 名のみが専門職で，他は通所者の母親たちである。活動内容は子どもによって異なる。月に 1 度，日曜日に保護者向けの勉強会も開催されていた。

事業所Ｚは放課後児童クラブ（学童クラブ）と小学生以下の障がい児のデイサービスを同施設内で提供しており，中学生以上の障がい者のデイサービスを別施設で提供している。開所してから約 9 年で，小学生以下の利用者は 43 名おり，大半が障がい児であった。利用者は石垣市全域の小学校 7 校と特別支援学校に在籍していた。放課後児童クラブのみを利用する児童が 6 名と幼稚園児[6)] が 8 名，児童発達支援を利用する幼稚園児が 7 名，放課後等デイサービスを利用する小学生が 22 名であった。以前は外国にルーツを持つ利用者がＡくん以外にもう 1 名いたが，調査時にはＡくんだけであった。スタッフは 12 名であった。年 2 回，個別の支援計画を立てるのに合わせて保護者と面談している。活動内容は遊びが中心で，読み聞かせ，ドリル学習，セラピー，土曜日には事業所外での活動も行い，年に 3 回ほど，海水浴や餅つきなどの行事もある。

Ｘ小学校の特別支援学級と 2 か所の事業所間では必要に応じて連絡を取り合っている。事業所Ｙでは，前年には特別支援学級の教員と連絡を取り合っていたが，時間に制約があ

ることや，Ａくんの課題が学習面だけであることなどから，調査時には連絡を取っていないということであった。事業所Ｚでは，Ｘ小学校の別の児童に対応するために教育委員会から特別支援員が派遣されていた時には，Ａくんの情報も入ってきていたそうである。しかしながら調査時にはＸ小学校に特別支援員は派遣されておらず，特に必要な時のみ特別支援学級の教員と連絡を取り合うとのことであった。

Ⅳ．調査結果

1．Ｘ小学校の特別支援学級と協力学級での社会関係

1）特別支援学級と協力学級でのＡくんの普段の様子

特別支援学級の担任教員から，特別支援学級と協力学級でのＡくんの普段の様子を伺った。

Ａくんは友だちとの会話には問題がないものの，家庭でも学校でも，話しかけられれば答えるが，自分から話しかけることは滅多にないという。担任教員は，自分がしたいことを自分から伝えることや，最低限の挨拶はできるようになってほしいと考えていた。母親は，分からないことや心配なことがあれば，担任教員に電話し，Ａくんが話していることや学校からの文書について質問するということであった。

担任教員によると，Ａくんは「本当に，日本人の子どもさん，という感じです」とのことであった。地球儀でフィリピンの位置を尋ねるとブラジルを指したそうで，世界地図を見せても，フィリピンがどこにあるかと聞くこともなかったそうである。しかしながらＡくんは前年, フィリピンに行く前, 周りの子どもたちに「フィリピンに行く, 飛行機に乗る」とよく話していた。Ａくんが普段日本語で話していることもあり，フィリピンにルーツを持っていることを知らない子どもたちが,「えー，フィリピン？」と反応していたという。フィリピンから戻った後には，お土産のチョコレートを「フィリピンのチョコレート」と言って配ったそうである。

担任教員は，Ａくんの国語と算数の学習進度の遅れに，母親がフィリピン出身であることが影響しているとは考えていないとのことであった。家庭で宿題に取り組む時間が充分に取れないようで，特別支援学級で勉強し始めた頃は宿題をしてこなかったが，通っている事業所に頼んで，事業所で半分くらい済ませて残りを家でやるようになると，できるようになったという。Ａくんは手先が器用で，得意な図工には進んで取り組み，コンクールに出品した絵は 2 年連続で受賞したそうである。

協力学級では担任教員も同級生もＡくんを手伝い，同級生は必要な時には声をかけ，Ａくんに分からないことがあると教えるとのことであった。Ａくんは自分が話したいことがあると，相手が興味を持っていなくても話し，同級生に対してつついたり，いたずらしたりすることもある。しかし自分の興味のないことには参加せず，休み時間に協力学級の同

級生と外で遊ぶことはなく，特別支援学級で好きな折り紙を折ったり絵を描いたりして過ごすとのことであった。

2）他の児童との関係

特別支援学級と協力学級で観察した際に，Ａくんと他の児童との関係が垣間見られた場面がある。

特別支援学級では調査当日，Ａくんは年下の女子児童と一緒に授業を受けていた。活動に使うゴザを準備する時，先生が「ゴザ敷きましょう」と言うと，Ａくんは先に取りに向かい女子児童と一緒に運んだが，一部を広げた後は，女子児童が移動させて広げ，準備を完了させるのを立って見ていた。先生に「なんで手伝わないの？」と言われたが，返答はなかった。ゴザを片づける時も，Ａくんは女子児童がたたむ様子を見ていた。運ぶのは手伝おうとしていたが，結局女子児童が一人で運び，Ａくんは「力持ち～」と言っていた。

Ａくんが協力学級の同級生と一緒に遊ぶことはないと聞いていたように，Ａくんは 2 校時と 3 校時の間の 15 分間の休み時間に協力学級には行かず，特別支援学級で絵本を読んでいた。給食は協力学級で班ごとに食べたが，班のメンバー同士でも会話はなく，Ａくんに特に話しかける様子もなかった。給食後，協力学級の 1 人の男子児童が，特別支援学級に戻るＡくんに「がんばれよ」と声をかけた。Ａくんは男子児童の方を見ていたが，表情に変化はなく，返答もなかった。特別支援学級の担任教員によると，その男子児童はＡくんによく声をかけてくれるそうである。Ａくんに積極的に関わろうとする児童はいないが，時々余裕のある児童が「こっちだよ」と声をかけたり，授業でＡくんの姿が見えない時に，特別支援学級に呼びに来たりするということであった。

Ａくんは同学年の児童に比べると小柄で体力では劣るため，体力作りが課題であると聞いていた。調査当日，Ａくんは体育の授業を協力学級で受けていた。馬跳びでは，Ａくんの馬がふらつくため，同じ班の約半数の児童はＡくんの馬を跳ばなかった。Ａくんが跳ぶ番になると，同じ班の児童たちは膝をついた低い形の馬を作ってＡくんが跳べるようにしていた。プリントに練習の感想を書く際には，Ａくんは 4 人の男子児童と一緒に書いており，男子児童らが手助けしている様子であった。

体育の授業終了後には全員で用具を片付けた。Ａくんはフラフープを 1 つ取って同級生へ渡した後は歩き回っていた。体育館を出て行こうとしたところ，女子児童に「Ａ，片づけ」と呼び止められ，白いマットを一人で運んだ。その後，同じ女子児童に，ネットを持ってくるように言われ，持ってきて渡した。しばらくして先生に呼ばれ，手伝ってネットをビニル袋に入れ，先生に「ありがとね」と言われた。

3）教会や母親のネットワークとの関係についての語り

Ａくんが特別支援学級で，自分が参加した教会のイベントや母親との外出を語った場面があった。

1 つ目は前日に参加した教会の 60 周年記念行事である。始業前，Ａくんは先生に「カンナムスタイル踊った」と言って踊り始めた。先生にどこで踊ったのか尋ねられると，Ａくんは「教会で。体育館で。」と答え，さらに何があったのか尋ねられると，「60 周年の･･･」と答えた。1 校時が始まったため会話はそこで中断された。

続けて 1 校時終了後に，記念行事の会場でＡくんに会ったことを筆者が話題にしたところ，始業前にＡくんが踊ったダンスの話になった。先生に誰と踊ったのか尋ねられると，Ａくんは一緒に踊った教会の友人らの名前を挙げた。さらに，振り付けを誰が教えたのか尋ねられると，「5 年 2 組」と答え，隣の組の友人が教えたことを伝えていた。

2 つ目は，母親と母親の友人と出かけたことである。授業中に，数日前に開催された石垣まつりが話題になり，何が楽しかったか尋ねられると，Ａくんは「花火」と答えた。誰と行ったかを尋ねられると，Ａくんは「お母さんとお母さんの友だち」と答え，母親と母親の友人と 3 人で一緒に行ったことを伝えた。

2. 事業所Ｙでの社会関係

Ａくんが事業所Ｙに通うようになったきっかけは，代表者が教育相談や療育相談に携わっていた際にＡくんの相談に関わるようになったことだそうである。Ａくんが就学前に先天性の疾患があると診断された際，医師は母親に英語で説明したため，母親は説明を直接理解できたが，代表者は詳しい説明を加えたという。事業所開業の数年後に母親に声をかけ，Ａくんが通うようになった。月に 1 度，日曜日に保護者向けの勉強会が開催されているが，母親は教会に通うなど別の用事があることが多いため参加は難しい。母親が沖縄本島で入院した時には代表者がＡくんを預かったそうである。

事業所ＹでのＡくんの活動内容は療育活動と学習で，学習面での遅れは 1 年くらいとのことであった。母親がフィリピン出身ということから日本語運用能力が低い面も見られるが，漢字の練習は自分でやってくるそうである。本を読んで楽しむことはまだできておらず，抽象概念を伸ばすことも必要であるとのことであった。

Ａくんはやるべきことを自分で決めて行動するのが苦手であるという。中学校進学後は，分からないことがあれば人に聞く必要があるが，なぜ必要であるか分かっていないということであった。代表者は，今後Ａくんには役割を持たせて，リーダーとして引っ張らせたいと考えていた。

活動を観察した時，音楽に合わせて歌詞を手話で表現する活動では，Ａくんは前で実演

するスタッフの手本に合わせて表現することができていた。国語の音読練習では，音読を聞いてくれるスタッフに「聞いてください」と言ってからしっかり読み，音読カードにサインをもらっていた。

活動後，他の利用者の子どもたちが送迎の順番を待っている間，Ａくんは折り紙で「ドラえもん」を作っていた。男の子 2 人がすぐそばにいたが，Ａくんは一人で作業に集中していた。「スモールライト」など言いたいことがある時だけ話し，話しかけられても返事をしないこともあった。男の子のうち 1 人は話し好きで，筆者に一生懸命話しかけており，筆者はその男の子の話に応えたりＡくんに話しかけたりしていた。男の子が筆者に，自分には「お兄ちゃんがいる」と言った時，Ａくんが「ぼくもお兄ちゃんいる」と反応した。

Ａくんは自宅が近く，徒歩で帰宅するため，最後まで事業所に残っており，スタッフに帰宅を促されるまで作業に熱中していた。

3. 事業所Ｚでの社会関係

Ａくんが事業所Ｚに通い始めたのは，役所での障がい児相談支援での相談がきっかけではないかとのことであった。母親は連絡が必要な際には電話を入れ，事業所側の連絡も日本語で聞き取れるので，意思疎通に問題はないということである。母親は動作訓練や行事にも参加しており，以前は役員も務めていた。

事業所に来る際，他の子どもは学校が終わってもすぐには迎えの車のところへ現れず，口実を作って学校を遅く出てきたりするが，Ａくんは迎えの時間を守って待っているそうである。Ａくんは手先が器用で工作が得意であり，ハロウィンパーティでも自分で仮装するという。テレビ番組のテーマソングの歌詞を全部書いてきたこともあり，得意なことで出番を作ってあげたいと，Ａくんが歌を披露できるよう，事業所でその歌を流したということであった。

職員は，Ａくんが「あえてお母さんがフィリピン人であると言わなければ，日本人としてのびのびと生活している」と語り，Ａくんには「ユーモラスなところがあり，そこがハーフのお子さんなのかなと思ったりする」と話した。Ａくんは 2 年ほど前にフィリピンに行った際，普段の日本での生活と同じように一人で外に出て迷子になり，カルチャーショックを受けた。母親は，大変慌て，心配し，大変だったと話していたそうである。当時Ａくんはまだ発話していなかったので，日本への帰国後，フィリピンでの出来事を話すことはなかった。

Ａくんが母親や兄の話題を自分から出すことはない。帰りの会で当日の出来事を話す時には，自分から挙手して発表するという。沖縄本島の教会でのイベントに参加して戻ってきた時には，買い物をしたことを伝え，沖縄本島にいたために参加できなかったハロウィ

ンパーティに参加したかったと話したということであった。

4. 母親を通じた教会やフィリピンとの関係

1）教会との関係

Ａくんの母親は結婚した当時から近所のカトリック教会に通い始め，仕事が休みであれば毎週日曜日に通っていた。教会の組織の 1 つで，フィリピン人で構成されているグループの活動にはあまり顔を出していないが，教会はフィリピン人にとって大切な存在であり，フィリピン人の友だちが集まる場であると語った。

Ａくんの兄はフィリピンで，Ａくんは日本で幼児洗礼を受け，Ａくんはクリスチャンネームを持っている。兄は中学生までは一緒に教会に通っていたが，その後は通わなくなった。一方Ａくんは調査当時，母親と一緒に教会に通っていた。月 1 回，フィリピン人信者の家庭を順に回り，マリア像に祈りを捧げる「ロザリオ」という集まりでは，聖書朗読や祈りの場と，その後に振る舞われるフィリピン料理の食事会に参加していた。

石垣島の教会で開催された 60 周年記念行事でＡくんは，ミサに参加した後，日本人やフィリピンにルーツを持つ子どもたちと一緒に合唱とダンスを披露した。年 1 回，沖縄本島の教会で開催されるフィリピン人信者の集まりにも母親と一緒に参加していた。筆者が参加した年のイベントでは，ミサに参加し，フィリピン料理を食べ，フィリピン人信者の歌やダンスなどの出し物を鑑賞し，子ども向けのゲームにも参加した。教会の集まりでは，神父やシスター，他の信者らから声をかけられて話をしたり，聞かれたことに答えたりする様子も見られた。

2）フィリピンとの関係

Ａくんの母親は自分の子どもたちに英語やフィリピン語を教えており，Ａくんの兄はフィリピン語も理解できる。Ａくんは 2 度フィリピンを訪れたことがある。母親は，神様に感謝するようにと子どもたちに伝えている。フィリピンの価値観を子どもに伝えたいと考えており，純粋な日本人ではなく半分はフィリピン人なのだからフィリピンの文化も持つべきだと話しているそうである。日本の子どもは親に反抗したり言い返したりするが，子どもが親に従順であることが大事だと考えている。家庭では厳しく接しているが，子どもたちは家の外では日本の文化に触れているため，フィリピンの信念や文化を教えることは難しかったと語った。

母親は老後，フィリピンに帰国し，日本には息子たちを訪ねてくるだけという生活を予定しているという。子どもたちに対する期待は特にないが，自立して暮らせるようになってほしいと願っている。フィリピンでは一般的である，子どもから親への仕送りについて

は，生活費または小遣いくらいを送ってもらえれば充分であると語った。

Ａくんには母親を通して家庭でも日常的にフィリピンの言語や価値観に触れる機会がある。フィリピンを訪れたこともあることから，フィリピンで暮らす親族とのつながりもあると推察される。

Ⅴ．地域での社会関係構築を可能にする島嶼性

調査結果からは，地域社会でのＡくんの社会関係について以下の 3 点が明らかとなった。

1 点目は，Ａくんが小学校のほかにも，2 か所の事業所や教会との関係を持っており，複数の場で関係を築いていたことである。湯原・大西・加納（2000）では障がい児を持つ外国人家族が地域社会への関係を持てるようにすることが必要であると指摘され，髙橋・中村（2010）では学校や地域に支援が広がらないことや，母親が情報入手や地域参加に困難を抱えていることが課題に挙げられていた。しかしながらＡくんと母親の場合は地域社会での人間関係があり，支援も受けていた。母親は行政が提供している療育相談や相談支援を利用し，Ａくんの教育や療育に関する情報を得ることができていた。

小学校や事業所，教会の大人や周囲の子どもたちに，Ａくんが自ら積極的に関わりを持とうとする様子は見られなかった。しかしながら，問いかけられたり働きかけられたりすれば行動を起こし，興味のある内容の会話には自ら入り，関係を築こうとする様子も見られた。事業所Ｙではスタッフに帰宅を促されるまで作業に熱中していた。事業所Ｚに通う日には，学校で迎えの時間を守って待っており，教会の行事で島外にいたために参加できなかった事業所Ｚのハロウィンパーティに参加したかったと話した。以上のことから，事業所は自分の居場所であり，支えてくれる人がいると感じていると考えられる。

2 点目は，Ａくんが年齢，国籍，所属の異なる多様な人との関係を築いていたことである。三好（2009）では，学童保育が地域との関係構築や地域における人間関係構築の場となっていると指摘されており，Ａくんの場合も同様のことが言える。Ａくんが利用している 2 か所の事業所は，Ａくんが通う小学校以外の小学校の児童のほか，幼稚園児や中・高生も利用している。事業所Ｚでは事業所外での活動も行われており，家庭や小学校以外での地域における人間関係を構築する機会がある。

Ａくんが関係を持つ場のうち，フィリピンにルーツを持つことが影響しているのは教会である。高畑・Vilog（2012）や三浦（2015）で言及されている，都市部に暮らすフィリピンにルーツを持つ子どもたちと同様に，Ａくんは信仰を通じた規範的価値観を学び，同世代の子どもたちとの関係を築いている。しかしながら，先行研究で挙げられている日曜学校やユースグループのような，子どもを対象とした，または子どもだけで構成される組織ではなく，大人と子どもが同席する場においてである。それらの場は教会の組織に組み

込まれている場合もあれば，「ロザリオ」の集まりのような教会外でのつながりである場合もある。

3 点目は，Ａくんが関係を築いている場には，フィリピンにルーツを持つことに重きを置かれている場と置かれていない場があることから，多様でもあるということである。髙橋・中村（2010）の研究では，特別支援学校や特別支援学級に通う外国人児童生徒の多くは日本生まれであることから，母親の文化的背景を肯定することが難しいと指摘されている。本稿の調査対象者であるＡくんも日本生まれである。特別支援学級の担任教員は「本当に，日本人の子どもさん，という感じです」と語っており，事業所の職員は「あえてお母さんがフィリピン人であると言わなければ，日本人としてのびのびと生活している」と語っている。Ａくんの名前は全て漢字表記であることから，フィリピンにルーツを持つことは見えにくく，小学校や事業所では，Ａくんが自身のフィリピンとの関係を発表する機会もない。Ａくんと関係を持つ周囲の人たちは，Ａくんがフィリピンにルーツを持っていることを認識しているが，日常生活での関わりや支援には，フィリピンにルーツを持つことは重視されていない。

Ａくんは母親や母親の友人らを通じて，日常的にフィリピンの言語や価値観に触れる機会を得ており，フィリピンにルーツを持つ大人や子どもとの関係も築いている。フィリピンも訪問し，フィリピンで暮らす親族との関係もある。Ａくんが母親の文化的背景を肯定しているかどうかを判断することは難しい。しかしながら，母親と一緒に訪れたフィリピンから戻った際には，お土産のチョコレートを「フィリピンのチョコレート」と言って配ったことと，自ら教会の記念行事での出来事を話したことから，少なくとも否定してはいないと言うことができる。

外国にルーツを持つ子どもや保護者は地域社会の人々と関係を持つことが難しく，また，子どもが母親の文化的背景を肯定することが難しいと先行研究で指摘されていた。しかしながら，先行研究での指摘とは異なり，Ａくんと母親は地域社会の人々と関係を築くことができており，Ａくんはフィリピンにルーツを持つことを否定してはいない。このことは「島嶼性」の視点からどのように説明できるだろうか。

野入（2016）は島嶼が都市や農村とは大きく異なる特徴を 2 点挙げている。1 点目は，島嶼に定住するフィリピン人女性たちは均質性が高く，親しみやつながりをもちやすいことである（野入，2016 : 23）。そして形成された島嶼型フィリピン・ネットワークは，当事者を孤立から守るセーフティーネットの機能を果たしているという（野入，2016 : 24）。2 点目は，島嶼には専門的な問題解決の機構が乏しく，当事者の主体性や日常のリアリティに根ざしたネットワークが見られることである（野入，2016 : 24）。

Ａくんは母親とともに自然にフィリピンにルーツを持つ人々のネットワークに入ったと

推察される。自然にネットワークを築けた背景には，島嶼の特徴である，フィリピンにルーツを持つ人々が関係を築きやすい環境が影響したと考えられる。さらに，その環境があることにより，フィリピンにルーツを持つことに重きを置かれていない場であっても，ルーツを隠すことなく，また孤立することなく生活できていると言うことができる。

Ａくんの周辺には専門的な問題解決の機構があり，小学校や事業所では専門家の支援が受けられる。しかしながらＡくんが事業所に通い始めたきっかけは，母親が教育相談や療育相談に赴いたことである。したがって，Ａくんの周辺には当事者の主体性に基づいたネットワークが形成されており，島嶼の特徴を有していると考えられる。

ただし事例が限られていることから，フィリピンにルーツを持つ人々が関係を築きやすい環境と当事者の主体性に基づいたネットワークが，島嶼で暮らす全てのフィリピンにルーツを持つ子どもの社会関係に影響していると断言することはできない。また上記 2 点の島嶼性が子どもの社会関係に影響を及ぼしていることが，石垣を始めとする先島諸島のみに見られる特徴であるのか，島嶼全体の特徴であるのかについても今後さらに検討する必要がある。

Ａくんが事業所や教会とのつながりを持てたのは，母親に負うところが大きい。しかしながら今後は成長とともに，母親だけを頼りにしての生活は難しくなる。母親は子どもに「自立してほしい」と願っており，将来フィリピンへの帰国を希望していることからも，Ａくんは母親がそばにいなくても生活できるようになる必要がある。

熊谷は「多くの人が『自立』と呼んでいる状況というのは，何ものにも依存していない状況ではなく，『依存先を増やすことで，一つ一つの依存先への依存度が極小となり，あたかも何ものにも依存していないかのような幻想を持てている状況』なのである（熊谷，2013：113）」という。熊谷が提案する「依存先の分散としての自立（熊谷，2013）」という考え方は障害の有無にかかわらず，子どもが育つ過程で必要な視点であると以下のように述べている。

> 障害者の自立というと，依存させないようにすることをイメージしがちですが，それではなけなしの依存先まで奪ってしまいかねません。そうではなくて，本当に自立するためには，ひとつの依存先が絶たれても，ほかの依存先がバックアップとして残っているという状態にしていくことだと思います。このことは，障害があってもなくても，特に子どもが育つ場面では必要な視点だと思います。（熊谷・山本，2015：45）

自立のためには，複数の依存先を持っている必要があるということである。熊谷の「依存先の分散としての自立」という考え方に基づくと，Ａくんや母親のように，関係を築けているところや頼れるところが複数あり多様である状態は，Ａくんが自立するために望ま

しい状態であると考えられる。依存先が複数あり多様である状態が望ましいことは，フィリピン以外の国や地域にルーツを持つ子どもたちや，日本人の子どもたちにも当てはまり，Ａくんの事例は示唆に富んでいると考えられる。

Ⅵ．今後の課題

本稿では石垣島における 1 人のフィリピンにルーツを持つ障がい児の地域社会での社会関係に着目した。調査対象者の小学生は小学校以外に，障がい児通所支援事業所や教会でも，地域の子どもや大人との関係を持つことができていた。また母親や母親の友人らを通じて，フィリピンの言語や価値観に触れる機会も得ていた。

しかしながら他の離島では，障がい児通所支援事業所の利用が難しいことや，教会を中心とした母親同士のつながりがないことが考えられ，状況が異なる可能性がある。今後は他の離島における外国にルーツを持つ障がい児の社会関係も調査したい。

謝辞

本研究に快くご協力くださいました，Ａくん，Ａくんのお母さん，Ｘ小学校の先生方，事業所Ｙと事業所Ｚの職員の皆様，カトリック教会の皆様，また特別支援教育に関連する記述についてご助言いただきました貝谷京子氏に心より感謝申し上げます。

なお本研究は平成 25 ～ 27 年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）「沖縄・先島地域のトランスナショナルな移動と社会関係－フィリピン人女性を中心に－」（代表者：野入直美，共同研究者:高畑 幸，松田良孝，中西尋子，水田憲志，矢元貴美）による成果の一部です。

注

1）1992 年に調査項目にフィリピンが加えられた。両方または一方の親が外国籍である子どもの出生数で調査対象とされるのは，日本で生まれ届が出された人である。本稿の調査対象者はこの人数に含まれている。

2）1990 年 6 月に出入国管理及び難民認定法の改正が施行された後，仕事等で来日する外国人に同伴される子どもが増加したことから，1991 年度より開始された調査である。1999 年度までは隔年で，1999 年度から 2008 年度までは毎年度，2008 年度以降は隔年で実施されている。1991 年度と 1993 年度は小・中学校のみが調査対象とされていたが，1995 年度から高等学校も加えられ，1999 年度からは中等教育学校と盲・聾・養護学校（現特別支援学校）も加えられた。1997 年度より前は「日本語を十分理解できないために，日本語指導等特別の指導を実際に受けている児童生徒」のみが対象で，1997 年度以降は「特別な指導を受けていなくとも日本語教育が必要な児童生徒」が対象となった。

「日本語指導が必要な児童生徒」とは，1）日本語で日常会話が十分にできない者及び 2）日常会話はできても，学年相当の学習言語が不足し，学習活動への参加に支障が生じている者で，日本語指導が必要な者をいう。明確な判断基準はないため，日本語指導が必要と判断されるかどうかは，判断する教員や学校によって異なる可能性もある。本稿の調査対象者は日本生まれ日本育ちで，日本語の理解は充分であると判断されていると考えられ，この調査の人数に含まれていないと推察される。

3）本稿でフィリピン語，フィリピノ語，タガログ語は全て「フィリピン語」と表記する。

4）2010 年に児童福祉法及び障害者自立支援法の一部が改正されたことにより，障害児通所支援の一つとして，2012 年 4 月から「放課後等デイサービス」が創設された。放課後等デイサービスの対象は，幼稚園及び大学を除く学校教育法第 1 条に規定する学校に就学している障がい児である。放課後等デイサービスでは，放課後又は休業日に生活能力の向上のための必要な訓練，社会との交流の促進等が行われている。（文部科学省，2012）

5）特別支援学級に在籍する児童が交流及び共同学習を行う通常の学級のことである。

6）沖縄では米国統治下で採られた保育政策により，公立幼稚園が広く普及した一方，保育所整備は遅れ，認可保育所の 5 歳児定員枠は少ない。そのため放課後児童クラブが降園後に保育を必要とする子どもを預かる受け皿となってきた。しかしながら 2015 年 4 月に導入された「子ども・子育て支援新制度」により，放課後児童クラブでは原則として未就学児を受け入れることができなくなった。（沖縄県社会福祉協議会・沖縄県福祉人材研修センター・沖縄県民生委員児童委員協議会，2004 ; 琉球新報，2014）

文献

稲葉陽二（2011）『ソーシャル・キャピタル入門－孤立から絆へ』中央公論新社 .

沖縄県社会福祉協議会・沖縄県福祉人材研修センター・沖縄県民生委員児童委員協議会編（2004）「特集　沖縄の五歳児保育問題」『福祉情報　おきなわ』95, 2-3.

熊谷晋一郎（2013)）「依存先の分散としての自立」村田純一編『知の生態学的転回 2　技術－身体を取り囲む人工環境』東京大学出版会 , 109-136.

熊谷晋一郎・山本たつ子（2015）「インタビュー : 障害児支援のあり方を語る」『月刊福祉』98 (2), 39-45.

厚生労働省（2015a）「人口動態調査　父母の国籍別にみた年次別出生数及び百分率（平成 26 年）」（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do, 2015 年 9 月 30 日閲覧）

厚生労働省（2015b）「人口動態調査　嫡出出生数，父の国籍・母の国籍別（平成 26 年）」（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do, 2015 年 9 月 30 日閲覧）

境 圭介・都築繁幸（2012）「発達障害が疑われる外国人児童の支援の在り方について」『障

害者教育・福祉学研究』8, 35-40.

菅原雅枝（2004）「外国人児童の『特別な教育的ニーズ』はどのように把握されるのか－ある中国人児童の事例を通して（第 28 回日本言語文化学研究会発表要旨）」『言語文化と日本語教育』28, 91-94.

髙橋　智・中村美樹（2010）「障害を有する外国人児童生徒の教育貧困の実態－本人・保護者及び学級担任への面接法調査から」『障害者問題研究』37 (4), 60-65.

高畑　幸・Vilog, Ron Bridget（2012）「在日フィリピン人と宗教」『M－ネット』153, 16-17.

黒葛原（つづらばら）由真・都築繁幸（2011）「外国人 ADHD 児の学習行動に関する分析」『障害者教育・福祉学研究』7, 59-73.

野入直美（2016）「沖縄･先島諸島で暮らすフィリピン人女性たちの生活世界－ネットワーク，リーダーシップと次世代継承を中心に」『移民研究』11, 7-36.

早川昌子・都築繁幸（2012）「自閉的傾向がある外国人児童の支援の在り方について」『障害者教育・福祉学研究』8, 41-45.

原田　徹（2015）「放課後等デイサービスの現状と課題」『月刊福祉』98 (2), 23-27.

三浦綾希子（2012）「フィリピン系エスニック教会の教育的役割－世代によるニーズの差異に注目して」『教育社会学研究』90, 191-212.

三浦綾希子（2013）「多文化地区における地域学習室の機能－ニューカマー 1.5 世を対象として」『移民研究年報』19, 69-87.

三浦綾希子（2015）『ニューカマーの子どもと移民コミュニティー第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房 .

三好正彦（2009）「障害のある子どもたちにとっての学童保育－社会的インクルージョンに向けた可能性」『社会福祉学』49 (4), 52-64.

文部科学省（2012）「資料 1：児童福祉法等の改正による教育と福祉の連携の一層の推進について」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/044/attach/1320467.htm, 2015 年 8 月 31 日閲覧）

文部科学省（2015a）「学校基本調査（平成 26 年度）」
（http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/eStatTopPortal.do, 2015 年 8 月 31 日閲覧）

文部科学省（2015b）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 26 年度）の結果について」（http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/__ics Files/afieldfile/2015/06/19/1357044_01.pdf, 2015 年 8 月 31 日閲覧）

湯原恵子・大西眞由美・加納尚美（2000）「障害児を持った在日外国人家族へのサポート」『茨城県母性衛生学会誌』20, 32-34.

吉田洋子・髙橋　智（2006）「障害・特別ニーズを有する在日外国人児童生徒の教育実態

ー外国人学校への質問紙調査を中心に」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系』57, 269-289.

琉球新報（2014）「幼稚園児，学童不可に　子ども・子育て新制度（2014 年 11 月 8 日）」（http://ryukyushimpo.jp/news/prentry-234267.html, 2015 年 11 月 29 日閲覧）

Putnam, Robert D.（1993）*Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press: New Jersey, USA（＝ 2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義ー伝統と改革の市民的構造』NTT 出版）.

Putnam, Robert D.（2000）*Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community,* Simon & Schuster: New York, USA（＝ 2006, 柴内康文訳『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房）.

（やもと　きみ・大阪大学グローバルコラボレーションセンター招聘研究員・国際協力学）

Social Relationships of a Child with Filipino Roots in a Remote Island: The Case Study of a Handicapped Elementary Student in Okinawa

YAMOTO Kimi

Research Fellow, Global Collaboration Center, Osaka University

Key words：Filipinos in Japan，handicapped child，community，church，island

This article aims to discuss the characteristics of the social relationships of a handicapped child with Filipino roots in his community in a remote island. Only few studies have focused on the social relationships of handicapped children with foreign roots in Japan and most of them deal with children who live in urban areas.

This article focuses on a male child who lives in Ishigaki Island in Okinawa Prefecture and attends a special class for handicapped children in an elementary school. Based on the interview with his mother, interviews and observations at the special class and two after-school day-care facilities, and observations at Catholic churches, the present study determines what kind of relationships the child builds with the people around him and in what kind of places he builds these relationships.

As for the child's social relationships, the following three points were elucidated. First, he has relationships in some places, not only at school but also at day-care facilities and churches. He and his mother have relationships with other people in their community, and they receive some support.

Second, he has relationships with diverse people of different ages, nationalities and affiliations. At day-care facilities, he mingles with children of different ages and schools. At churches and the Block Rosary, he studies normative values through faith with adults and children of his generation.

Third, these places are also diverse in the sense that his Filipino roots are emphasized in some and de-emphasized in other places. The people around him recognize that he has Filipino roots but his roots are de-emphasized in his daily life. However he is also exposed to Filipino language and Filipino values on a daily basis through his mother and her friends.

It is considered that the environment in which people with Filipino roots can easily have relationships with each other, which is one of the characteristics of islandness, has an effect on the condition where he and his mother could have relationships with peple with Filipino roots. His mother used consultation services and this was how the child started to use day-care facilities. This fact reveals that the networks based on the actor's initiative, which is another characteristic of islandness, are built.

However, as the current study is limited, it cannot be definitively said that the above mentioned characteristics of islandness affect the social relationships of all children with Filipino roots living in islands. It is also necessary to examine more closely whether the effect of these characteristics of islandness can only be observed in Sakishima Islands, including Ishigaki, or in all islands in general.

As his mother wishes for the independence of her children and desires to go back to the Philippines in the future, the child needs to live independent of his mother. The situation in which the child and his mother have plural and diverse places in which they build relationships and which they can rely on are considered helpful for his independence.